

豊後高田 田染（たしづ）地区 生きた中世の村

2013年8月23日
NHKラジオ



田染荘(たしづのしょう)小崎(おさき)地区
ここは中世の荘園集落が今も息づいている地域である。

右手の集落が昔からの荘園の管理者の住居地域である。背後の山は西叡山。平安時代からこの地域の集落の位置や水田もほとんど変わっていないということである。

景観コンテスト 説明文

水田や周囲の景観を中世の時代よりそのままの姿で守り、受け継いでいるのが、ここ豊後高田市「田染荘小崎地区」である。

今から約1000年前より水田の開発が始まり、中世には八幡社の総本社である宇佐神宮が最も重視した荘園であった。

周囲は国東六郷満山ゆかりの山々に囲まれ、四季を通じて美しい風景を醸しだしており、まさにここは農村の原風景である。

また、ここは水田の発祥から変遷までを知るとともに、水と農の関わりを学ぶことができ、まさに水田の一枚一枚に歴史が刻まれている。

小崎の里は時代の流れの中で、開発か保存かに揺れたが、保存の道を選択し、住民主体に「荘園の里推進委員会」を設置し、美しい風景・歴史・文化を活かしたエコミュージアムづくりを進め、都市住民との交流を推進している。

田染荘の由来

田染荘小崎地区には小崎川が流れており、宇佐神宮の力によって、水田が開発されてきました。

やがて、宇佐神宮が支配する荘園となり、田染荘が誕生します。小崎はこの荘園の発祥の地です。

この荘園は、宇佐神宮の「本御荘十八箇所」と呼ばれる根本荘園の一つで、最も重要視された荘園であり、11世紀前半に成立したと推定されています。

宇佐神宮は九州内に二万町歩を超える荘園を持った全国でも屈指の荘園領主でありました。

しかし、鎌倉後期になって、田染荘は関東の御家人に領主権を奪われてしまいます。

ところが、蒙古襲来のおと、神社も「異国調伏」などでいくさにご貢献したということから、旧神領の返還が認められ、宇佐神宮は小崎に屋敷を確保し、管理者の神官の子孫が田染氏を称し、小崎が宇佐神宮の田染支配の拠点となったのでした。

小崎地区の現集落となっているところは田染氏の住居のあとで、小崎屋敷・飯塚屋敷・為延屋敷の名称が今も残っており、集落の原型がこの時代に出来上がりました。